

## [研究会報告]

## 第4回日本国際小児保健学会学術大会 2020 開催報告

田中 孝明

川崎医科大学小児科学教室

## I 緒言

本学会は、1995年に「国際小児保健医療の集い」として設立され、「国際小児保健研究会」として47回の学術大会を経て、2017年に「日本国際小児保健学会 (Japan International Child Health Association; JICHA)」の名称で学会化された。「子ども、健康、国際」をキーワードとして、国際保健医療や小児保健に関する活動および研究を行っている。

国際保健は「世界の国々や地域の健康格差を解明・解決する学問」である。過去と比較して健康格差が減少してきたことは確かであるが、救いの手を必要とする人々は依然として存在している。彼らを見て見ぬふりをすることは容易であり、寄り添うには大きなエネルギーを要するが、国際保健医療に従事する私たちの使命として「だれひとり取り残さない (no one left behind)」ために、「すべての子どもたちに寄り添う」をテーマとして今年度の学術大会の準備を開始した。その中で、2019年末からの新型コロナウイルス感染症パンデミックにより、突然世界が変わり果ててしまった。当初、その影響で大会開催の中止が検討されたが、先の見えない暗闇の中でまだ答えがないものに立ち向かうために、今しかできない学びの場を求め、学術大会の開催に至った。

2020年9月19日、オンライン配信（日本WHO協会共催）で第4回日本国際小児保健学会学術大会2020を「すべての子どもたちに寄り添う—Withコロナ時代に向けて—」のテーマで開催し、参加登録者400名で盛会のうちに終了した。開催内容は、小児のCOVID-19 (Coronavirus disease 2019) に関するシンポジウム形式とし

た。

## II 学術大会概要

## 第1部「国内外の小児 COVID-19 総ざらい」

(座長：中野貴司氏、田中孝明)

日本と世界における小児 COVID-19 の現場では、今何が起きているのか、今何をしているのか、今後どのようにウイルスと付き合っていくのか、先の見えない中で、国内外の専門家から最新情報を提供し、日本と海外で相互に学び合う場を目指した。

## 1-1. 世界と日本の小児 COVID-19 の状況

高橋謙造氏 (帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授)

小児科医、公衆衛生学専門家の立場から、小児 COVID-19 の臨床的特徴 (重症度、感染伝播力、川崎病様症状)、ファクターX (BCG 接種の影響、Trained immunity)、予防接種控えの問題点などの最新情報を提供した。

## 1-2. 積極的疫学調査の経験から

神谷元氏 (国立感染症研究所感染症疫学センター 主任研究官)

全国を駆け巡る積極的疫学調査班の立場から、COVID-19 の疫学情報、感染源、感染リスク因子、感染伝播力、現場に赴くことの大切さ、現場に即した政治判断の大切さについて、情報提供した。

## 1-3. ラオスにおける急性期の“COVID-19 対応”から“New normal”への移行

窪田祥吾氏 (WHO ラオス国事務所 母子保健チームリーダー)

WHO 専門家の立場から、ラオスにおける COVID-19 の現状、患者数が少ない理由、感染拡大抑制および二次的災害の防止に関する方策について、具体的な実施例を元に情報提供した。

#### 1-4. スイスを中心とした欧州の経験から学んだこと

氏田由可 氏 (国際労働機関ジュネーブ本部 労働行政・労働監督・職業安全衛生課 安全衛生専門官)

欧州滞在者、学校の保健安全アドバイザー、小児科医の立場から、スイスおよび欧州における COVID-19 の現状、ロックダウンにおける生活、日本語補習学校の現状と課題について、情報提供した。

#### 第2部「誰ひとり取り残さない社会へ」

(浦部大策 氏、足立基 氏)

小児 COVID-19 は患者数や重症例が少ないとされている。しかし、コロナ禍において学校閉鎖や授業再開、外国人小児診療、社会状況やメディア報道による心へ与える影響、受診形態など、目に見えない大きな問題が生じている。だれひとり取り残さないために、様々な分野の専門家による情報提供から、子どもたちが困っていることに対する解決の糸口を探った。

#### 2-1. コロナ禍の学校生活

中野貴司 氏 (川崎医科大学小児科学教室 教授)  
小児科医、感染症専門家の立場から、日本小児科学会ウェブサイトの紹介、学校閉鎖の意義と小児の成長発達に与える影響、世界における学校閉鎖の現状、コロナ禍における学校生活の心得について、情報提供した。

#### 2-2. 99.9 —これからのインバウンド対応—

山元佳 氏 (国立国際医療研究センター国際感染症センター 医師)

外国人診療専門施設における感染症専門家の

立場から、訪日外客数 (-99.9%)・在留外国人数の推移、インバウンド診療の問題点と対応 (文化、言語、医療費支払い、輸入感染症、出入国管理)、外国人における COVID-19 リスクについて、情報提供した。

#### 2-3. コロナとココロ～児童精神科の視点から～ 柿元真知 氏 (三重県立子ども心身発達医療センター 医師)

児童精神科医、小児科医の立場から、学校閉鎖、COVID-19 への恐怖心、社会情勢の急激変化が小児の心に与える影響について、外国人小児も含めて情報提供した。

#### 2-4. With コロナ時代のオンライン診療

加藤琢真 氏 (厚生労働省 医政局医事課 医師養成等企画調整室長)

厚生労働省、新型コロナ対策推進本部医療班の立場から、国内のオンライン診療の現状と課題、コロナ禍における電話やオンライン診療・服薬指導の実際について、情報提供した。

### III 結語

国内外の様々な立場の演者から小児の COVID-19 を取り巻く状況について情報提供があり、活発な討論が行われた。外国人や神経発達症児などの少数派も含め、だれひとり取り残さないために、全ての子どもたちに寄り添うことが、With コロナ時代における本学会の使命であると確認できた。

#### 謝辞

ご多忙の中、多くの方々にご参加いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

